

ダニエルス歴史班 A

碑文から見た巍山地域の中国系宗教について—16 - 18世紀を中心として— 立石謙次（東海大学文学研究科博士課程後期）

キーワード：巍山 中国系宗教 碑文 寺院・道觀

調査期間・地域：'03年8月25日-9月22日、'03年11月24日-12月23日および'04年2月18日-3月5日。
ただし、'04年2月18日-3月5日は別予算による補足調査。中国雲南省大理白族自治州巍山県

The Chinese religion in the Weishan 巍山 region from the 16th to 18th century as seen from stone inscriptions.

TATEISHI Kenji (graduate course of literature Doctoral student in Tokai University)

Key Word: Weishan, Chinese religious, stone inscriptions, Buddhist and Taoist temple

Research Period and site: 25.Aug.2003~22.Sep.2003, 24.Nov.2003~22.Dec.2003, 18.Feb.2004~5.Mar.2004
Weishan prefecture of Dali, Yunnan province, China.

要旨：本報告では、今回、中国雲南省大理州巍山県での碑刻資料から収集した拓本資料の中から特に数点を紹介する。そして、これら資料の、従来不明な点の多かった16 - 18世紀巍山周辺での仏教・道教などの中国系宗教研究における有用性について述べていく。

1. はじめに

今回¹、調査を行った地点は、この巍山県にある道教の聖地として知られている巍宝山およびその周辺の仏教寺院である玄龍寺、円覚寺（ともに巍山県城東南3km）月波庵、慧明禪寺（ともに廟街郷）などである。巍宝山は唐代の大巍山であり、すでに9世紀末の南詔国末期に作られたとされる『南詔図伝』にその名が見られる。『南詔図伝』によれば、この地には觀音菩薩が現れて南詔初代細奴羅及び2代羅盛の夫人たちに、彼らの夫が雲南において王たることを予言した土地であることが説かれている [立石 2003a: 25]。このため、巍宝山は古くから聖地として敬われてきたと考えられる [巍山彝族回族自治県県志編委会編 1989: 7-9]。しかしながら、道教の聖地として発展したのは明末清初ごろのことであるとされる [郭武 2000: 377]。

一方、巍山盆地の寺院・道觀で、このたび最も古い碑刻資料が見つかったのは、巍山県廟街郷にある慧明禪寺においてである。同寺院では明・万暦24年（1596）の『慧明禪寺碑記』を採拓した。これについては詳述したい。このため、巍山の盆地地域では少なくとも明代には中国系の仏教が伝わっていたと見て間違いない。

雲南地方での中国系仏教の伝来はすでに8-9世紀の南詔国時代には伝わっていた [立石 2003 b: 63]。しかし、その仏教は南詔国の建国の象徴である觀音信仰を中心として、その他の土着的な諸信仰が融合した土着仏教であった [立石 2003 b: 78-79]。その後、明朝の雲南征服直後に、大量の中国人が雲南地方に流入してきた。これにともなって、明王朝は多くの中国の僧侶を雲南の開拓と教化に当てたとされる [楊学政主編 1999: 99-100]。このため、雲南の宗教史上において、明清時代は1つの画期的な時期であるだけでなく、中国人口の雲南への移動という問題についても重大な意味を持っていると考える。つまり、このたび収集した、明清代の宗教施設における石碑の分析により、雲南における中国人移入の問題に新たな知見が得られると考えるのである。

また、このたび得られた資料の中には、一部すでにテキスト化されて出版されているものもあった [薛琳 1995]。しかしながら、これらには明らかな誤りがあり、あるいは恣意的な省略が見られる。さらにこれら出版物では、拓本や現物資料を提示していないため、その誤り、省略を確認できない。このため、今回収集した資料の意義は非常に高いと考える。

2. 調査実施地点の歴史背景

今回調査を実施した巍山県は、雲南地方に独立国として展開した南詔国（653？～902）の王家である蒙氏の発祥地であり、当時は蒙舍川と呼ばれた。南詔国4代皮羅閣（在位728～748）時代、南詔国は北上して、首都を大理に定めた。そのため、その後は巍山北部の大理が南詔国・大理国（937～1253）時代の首都となった。

南詔国が首都を大理に定めた後、この巍山には陽瓜州がおかれた。南詔五代閣羅鳳の子である鳳伽異（即位前に死亡）が州刺史となった。『元史』卷61・雲南地理志によれば、大理国時代になるとこの地には開南県が設置されたようであるが、その詳細についてはわからない。

1253年に大理国はモンゴルの侵攻により滅んだものの、大理国王段氏の末裔はいわゆる大理総管として元一代を通じて大理を中心とした地域の支配をゆるされた。雲南が元朝の支配下に入った後の至元11年（1274）、巍山には蒙化府は設置され、至元14年（1277）には蒙化路とされた。しかし至元20年（1283）には蒙化州となり大理の所属下に戻された。

ただし、大理国王の末裔で、大理総管の段氏はこの蒙化州の知州を経験した後に、総管の職についていたという指摘もあり [林1996:15]、この地が古くから現地の支配層に重視されていたと考えられる。

そして洪武15年（1382）、明朝の雲南征服により、蒙化（巍山）を含む大理地方も中国の直接統治を受けるようになった。そして、『明実錄』の記載によれば、雲南平定直後の洪武15年（1382）4月、明朝は直ちに大理府および蒙化などの州に儒学を設置している。これは雲南でもっとも早い明朝での儒学設置の記述である。このため、明朝でもこの地を文化的な面で重要視していたと考えられる。

3. 収集資料から見た巍山の中国系宗教

1] 巍山県での収集資料

今回、巍山県において収集した拓本資料の具体的な件数及び各碑名については、歴史班清水・野本の個人報告にゆずるとして、収集した資料は大体において以下の3種に分類できる。

- ①：寺院や道觀・祠廟などの創建・重建の記念碑記。
- ②：寺院や道觀所有の土地を記した常住田碑記、寺院や道觀・祠廟に納めた献金などの内訳を記した功德碑記。
- ③：墓碑銘。

ただし、①と②とは1つの碑文として書かれるものも多い。本報告ではその中からとくに典型的な資料について述べていくことにしたい。

2] 巍宝山『重修青霞觀碑記』について

すでに述べたように、巍宝山は明末清初頃から発展した道教の聖地である [郭武 2000:377]。先に紹介した『南詔図伝』の記述から、それ以前は南詔初代細奴羅が觀音菩薩より王たることを授記された地であると認識されていたと思われる。このため、巍宝山の道觀内に見られる宗教的世界觀にも土着的な要素が見られる。この問題について、まず巍宝山の道觀の1つである青霞觀嘉慶15年（1810）に立てられた姚鳳儀の『重修青霞觀碑記』に記述について見ていくことにしたい。この『重修青霞觀碑記』によれば、青霞觀は康熙22年（1683）に建立されたとされている。また康熙『蒙化府志』によれば、清微觀とも呼ばれていた。

さらにこの『重修青霞觀碑記』の記述を見ていくと、「巍山の靈峰は言い伝えによれば道祖（太上老君）が顯化された土地である。南詔発祥も実にここにもといしている」と述べている。またその後、唐の貞觀年間に南詔初代細奴羅が、太上老君が変化した不思議な老人に出会い、南詔国が建国されることをほのめかし去っていく記述が見られる。

実はこの記述は古くは『南詔図伝』に見られるものである。しかし、細かく見ていくと、直接には清・康熙37年（1698）序刊、蔣旭の康熙『蒙化府志』（光緒7年（1881）重刊本）卷1の「蒙氏始末」や清・康熙45年（1706）年に大理の聖源寺の住持である寂佑という人物によって刊刻された『白国因由』 [立石 2004:

263-292]などの記述を引用したものだと思われる。しかしながら、『南詔図伝』[立石 2003a:24-26]及び「蒙氏始末」、「白国因由」などの資料では、初代南詔細奴羅の王となることを予言した老人は觀音菩薩が変化した梵僧ということになっている。管見の限り、この説話を太上老君と細奴羅の事として述べた資料は『重修青霞觀碑記』以外に見られない。とにかく、この資料は雲南、特に大理地方ですでに9世紀末の南詔国末には伝わっていた伝説を取り入れて、巍山での道教の伝教を述べようとしている。道教の現地化を考える意味でも、この資料は非常に興味深い。また、その他にも巍宝山では、このたび道士以外に「禪師」の称号を持つ人物の墓碑を数点発見している。この「禪師」の称号は明らかに佛教僧のものである。このため、同地の性質を単に道教の聖地という枠で考えるよりも、雲南の中国系宗教全体の聖地としてとらえるべきであろう。

また、『重修青霞觀碑記』には道士の名前が見られる。たとえば、『重修青霞觀碑記』の撰者である姚鳳儀以外にも、「明初、青衣道士が櫟榆（大理）より来たり」、「我が朝、康熙22年（1683）羽客（外来の道士）沈君妙章、…基を劈いて宇（青霞觀）を立てる」、「康熙45年（1706）、郡（蒙化）の善姓及び羽士（道士）葛來易が坊を立てるために（資金などを）募った」などの記述が見られる。上述の明初の記述は具体的でないものの、清代の記述については記述も具体的で、比較的信用してよいと考える。

後代の史料になるが民国9年（1920）序刊の『蒙化志稿』卷12・祠廟志・青霞觀条によれば康熙22年（1683）にこの地を開いた沈妙章は道教の一派でも全真教の人であったと記されている。また『重修青霞觀碑記』では、沈妙章は「羽客」とされていることからもこの人物は外来の道士であったとも推定できる。

実際、地方志などの記述を通覧しても、当時の道士や僧侶についての中国の他地域との交流や、人の動きについてはきわめて限定的な記述しかみられない。今後分析を進めていかなければならないものの、このたび得られた碑文によって、雲南の宗教界での動向について、新たな知見が得られると考えるのである。

3] 盆地地域の碑刻資料数点について

巍山県には巍宝山以外の場所にも佛教寺院などが点在している。すでに述べたが、巍山県において、今回収集した拓本資料の中で最も古いものは廟街郷の慧明禪寺の明・万暦24年（1596）『慧明禪寺碑記』である。そのほかにも巍山県城東南3kmにある円覚寺には、天啓2年（1622）の『重建円覚寺後院新置常住田碑記』、明・崇禎17年（1644）の『円覚寺南院新置常住福田碑』がある。そして円覚寺に隣接する玄龍寺では明・永暦17年（1656）の『合建玄龍寺碑記』などの碑刻資料を採拓した。このため、巍山盆地では少なくとも17世紀中葉には中国系佛教が伝来しており、佛教寺院が建立されていた事は間違いない。

このたび得られた拓本の中には、円覚寺に現存する『重建円覚寺後院新置常住田碑記』と『円覚寺南院新置常住福田碑』をはじめとする常住田碑記が見られる。常住田碑記とは、寺院・道觀などが所有あるいは新たに寄進された土地の所在地、面積などが記されている。これら記載は地方志などには見られないかなり詳細な記述が多い。なおかつ、従来碑文資料の収集の目的は当時文人たちの文章の鑑賞にあり、単に土地のデータを羅列している常住田碑記は注目されてこなかった。ただし、これら常住田碑記に記載される詳細な地名とその所在、面積、あるいは耕地の種類などの情報は、生態史にとって非常に重要な内容である。このため、この寺院・道觀などの常住田碑記の収集・分析は、今後の生態史研究にとって、必要な研究作業なのである。

まとめ

今後の課題とはなるものの、このたび収集した宗教関係の碑文の分析を通して、当時の中国の他地域と雲南での宗教界との交流や人材の移動という問題の解明の一助となりうることが期待できる。また詳細な地名、土地面積、耕地の種類などが記された、常住田碑記の分析は、従来まったくといっていいほど行われていない。これら常住田碑記の分析研究を通して、雲南の寺院・道觀の土地利用・運営の問題について重要な知見が得られると考える。そしてひいては、これら碑文から得られる情報から、当時の雲南における漢人移入の問題、そして16世紀から18世紀にかけての雲南における土地利用の問題解明の一助となると考えるのである。

参考文献

林謙一郎 1996 「元代雲南の段氏総管」『東洋学報』78 - 3、pp.1 - 32.

立石謙次 2003a 「『南詔図伝』文字巻校注」『東海史学』37、pp.19 - 35.

——— 2003b 「南詔国後半期の王権思想の研究—『南詔図伝』の再解釈—」『東洋学報』85 - 2、pp.51 - 85.

——— 2004 「『白国因由』校注」(未定稿)『アジア・アフリカ言語文化研究』No.67に掲載予定、pp.263 - 292.

郭武 2000 『道教与雲南文化—道教在雲南的伝播・演变及影響』雲南大学出版社.

巍山彝族回族自治县志編委会編 1989 『巍宝山志』雲南人民出版社.

薛琳輯注 1995 『巍山風景名勝碑刻匾聯輯注』雲南人民出版社.

楊学政主編 1999 『雲南宗教史』雲南人民出版社.

[Summary] This report introduces several rubbings of stone inscriptions collected in Weishan county 巍山県 of Dali 大理 of Yunnan province, China and shows how they are useful for the study of the Buddhism and Taoism there during the 16th-18th centuries.

注

¹ 03年8月24日-9月22日、03年11月24日-12月23日および2004年2月18日-3月5日。ただし、2004年2月18日-3月5日は別予算による補足調査。